

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：15401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24830053

研究課題名(和文)高齢者の精神的健康における自律性の役割

研究課題名(英文)Psychological autonomy and mental health in the elderly

研究代表者

深瀬 裕子 (Fukase, Yuko)

広島大学・教育学研究科(研究院)・助教

研究者番号：80632819

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：高齢者における心理的自律性は、老化の中で精神的健康を維持するための最後の砦といえる。本研究では、まず、心理的自律性について「自らの老いに対する態度」と「心理的自律性」の2つの軸から構成される仮説モデルを生成した。次に、この仮説モデルに基づいて心理的自律性を測定する尺度を作成し、精神的健康、日常生活機能との関連を検討した。分析の結果、心理的自律性と精神的健康の間には関連が認められたが、日常生活機能の間には統計的に有意な関連は認められなかった。今後は、心理的自律性の概念の再検討とともに、幅広い日常生活機能を対象としたサンプリングが課題である。

研究成果の概要(英文)：Psychological autonomy in the elderly is the last line of defense against mental health problems associated with aging. I have developed a scale to assess psychological autonomy in the elderly. The questionnaire, which is measure of psychological autonomy in the elderly, life satisfaction index K (LSIK), and the instrumental activities of daily living scale (IADL), was sent to 600 elderly people living at home. The measure of psychological autonomy in elderly has three subscale that is autonomy, dependence and acceptance of aging. The cluster analysis identified three clusters, which is autonomy of the elderly, denial of aging, and dependence in the elderly. In the total score of the LSIK, autonomy of the elderly and denial of aging were significantly higher than dependence in the elderly. However, there was no significant association between the IADL and any interaction. Needed next in this research are studies of the elderly who do not live at home.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：心理的自律性 高齢者 精神的健康 面接調査 質問紙調査 尺度作成

1. 研究開始当初の背景

(1) 老いに対する態度と精神的健康

長寿社会の日本において、身体的健康や認知機能の老化に抵抗するだけでなく、それらが老化するなかで人生をいかに豊かに生きるかを考える必要がある。これまでの研究においても、日常生活機能の低下は、医療や福祉の進歩によって、必ずしも精神的健康の阻害に直接関連しないという報告があり (Davies et al., 1997)、老いを経験しながら自分らしく生きることが高齢者研究の課題であり、この点について心理的側面からの研究が求められる。

(2) 精神的健康における心理的自律性の意義

そこで申請者は、心理的自律性という概念に着目し、精神的健康におけるその役割を検討することとした。そもそも自律性は、自己決定、自由、独立、選択と行動の自由を含む諸概念であり (Collopy, 1988)、身体的自律性や主張性などを含む広い意味を持つ概念である。これを踏まえ、高齢者における心理的自律性を、自分の生活や生き方において、その範囲が限られていても、自己決定、選択性、意思性を持っている実感と定義した。すなわち、老いという避けられないプロセスにおいて、自律の意思をもって生きる感覚を維持することであり、老化の中で精神的健康を維持するための最後の砦といえる。

ところで、わが国において高齢者を対象とした自律性の研究は、医療的措置場面と施設入所高齢者に関して着手されたばかりであり (Hayashi et al., 2000; 田川, 2006) 国外においても、高齢者にも使用できる尺度の作成や、高齢者の自律性が果たす役割の研究が行われているものの、まとまった知見は得られていない (Rennemark et al., 1997; Sibley et al., 2006)。

2. 研究の目的

以上より本研究では、高齢者の心理的自律性について、研究手法の検討と仮説生成、測定尺度の作成を行い、今後の心理的支援のための基礎的知見を得ることを目的とした。まず研究1で面接調査を行い、高齢者が自らの心理的自律性を意識化できるかを検討した。これは、今後の研究における調査方法の検討のためである。加えて、得られた語りのデータを分析し、心理的自律性に関する仮説モデルを生成した。研究2では、この仮説モデルに基づき、心理的自律性を測定するための尺度を作成し、尺度の構造を確認し、精神的健康、日常生活機能との関連を検討する。

3. 研究の方法

研究1では、20人の高齢者を対象に半構造化面接を実施した。調査項目は、高齢者の自律性に関する先行研究 (Van den Broeck, et al., 2010; Burke, et al., 2001; Hmel, et al., 2002; 松井, 2007; 下仲他, 2000 など) から収集した。語りから逐語記録を作成し、カテゴリを生成

した。

研究2では、心理的自律性を測定するため、国内外の心理的自律性に関する研究を参考に (Broeck et al., 2010; Heathcote, 2000; Hirschfeld et al., 1977; Luppi, 2010; 松岡他, 2003; 中西・佐方, 2001; 西田, 2000; Perrig-Chiello et al., 2006; Rodgers et al., 2012; Ruth et al., 1994; 島田他, 2008; 下仲他, 2000; Stuijbergen et al., 2010; 若本・無藤, 2006)、中高年期と自律性をそれぞれ専門とする臨床心理学の研究者3人で協議し、20項目からなる尺度を作成した。精神的健康を測定するために生活満足度尺度 (Life Satisfaction Index-K;古谷野, 1989) を、日常生活機能を測定するために IADL (instrumental activities of daily living; Lawton & Brody, 1969) を使用した。以上の質問紙を600人の高齢者に依頼し、270部を回収した。

4. 研究成果

研究1 心理的自律性の測定方法と仮説生成

半構造化面接を実施した結果、心理的自律性は、日常生活上あるいは身体・精神面に関して高齢者自身が意識し、言語化するものであることが明らかとなった。ただし、その一部は無意識的あるいは感覚的なものであることも示された。

また、語りの分析により、老いの過程における心理的自律性は、「自らの老いに対する態度」と「心理的自律性」の2つの軸から構成されることが示唆された (図1)。

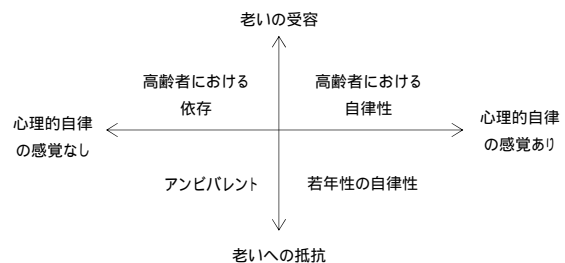


図1 高齢者の心理的自律性の仮説モデル

研究2 尺度の作成と関連要因の検討

20項目で構成された心理的自律性を測定するための尺度について因子分析を行ったところ、「他律性」「自律性」「老いに対する態度」の15項目3因子が妥当と考えられた。ただし、特に「他律性」に関する定義はさらに検討する必要があると考えられた (表1)。

表1 高齢者用心理的自律性尺度 (斜交回転)

項目	因子負荷量		
	F1	F2	F3
F1. 他律性 ($\alpha=.88$)			
16. 自分の考えは、そのときの状況や他の人の意見によって左右されがちである	.78	.06	-.20
18. 重要なことを決めるとき、他の人の判断に頼る	.78	.07	-.11

10. 物事を判断する際、周りに影響される	.77	.04	.01
15. 自分の意見を言うのは苦手だ	.69	-.01	-.11
3. 自分で何かを決めるのがとても大変だ	.68	-.05	.10
8. 決断を下す時、いつも誰かにアドバイスを求める	.65	.06	.15
5. 年のせいで何か困難なことにぶつかったときに、新しい手段や方法を見つけることは難しい	.62	-.16	.15
2. 年をとったら、自分で解決できない問題には取り組まなくなる	.55	.04	.08
F2. 自律性 ($\alpha=.76$)			
19. 老いによる困難な出来事に出会っても、前向きな面を見つけることができる	-.07	.73	-.06
13. 自分の考えや意見を自由に言うことができる	-.07	.71	-.09
12. 自分の判断に自信を持っている	-.07	.64	.12
11. 年をとって大きな困難に直面しても、自分の目標や計画をあきらめない	.09	.56	.09
20. 以前とは違う自分らしさについて考えるようになった	.19	.52	.03
F3. 老いへの態度 ($\alpha=.70$)			
9. 年をとった自分を受け入れることができる	-.02	.08	.78
7. 今までできたことができなくなっても、受け入れられる	-.01	.00	.64
因子間相関			
F2	-.35		
F3	.32	.15	

次に、得られた3因子(他律性、自律性、老いへの態度)の標準得点を用いてクラスター分析(Ward法)を行い、対象者を3群に分類した(図2)。クラスター1(N=104)は、他律性が低く、自律性が高く、自分の老いを受け入れているという特徴が認められた。ありのままの自分に合った自律性を保持する群だと考えられたため、老いに準ずる自律群と命名した。クラスター2(N=46)は、他律性が低く、自分の老いを受け入れないが、自律性は高くないという特徴が認められた。自らの老いを認めず、人に頼らない群だと考えられたため、健康に基づく自律群と命名した。クラスター3(N=105)は、他律性が高く、自律性が低いが、自分の老いを受け入れているという特徴が認められた。自らの老いを認めて人に頼るが、他律が高すぎて自律性の実感を持ってない群だと考えられたため、依存による老い受容群と命名した。

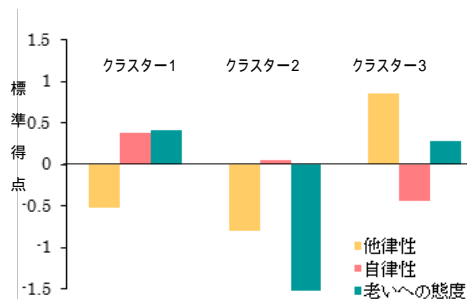


図2 心理的自律性因子によるクラスター

精神的健康との関連では、生活満足度尺度とクラスター間に統計的に有意な関連が認められた(図3,4)。まず、下位尺度の老いへの評価の平均得点において、有意な差が認められ($F(2, 234) = 14.28, P < .001$)、老いに準ずる自律群と健康に基づく自律群が、依存による老い受容群よりも高いことが示された($P < .001; P < .001$)。また、生活満足度尺度の総得点の平均においても有意な差が認められ($F(2, 234) = 9.59, P < .001$)、老いに準ずる自律群と健康に基づく自律群が、依存による老い受容群よりも高いことが示された($P < .001; P < .01$)。

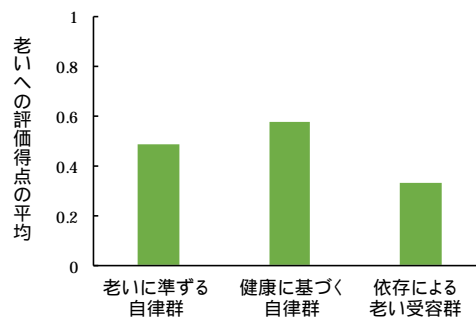


図3 老いへの評価と各クラスターの関連

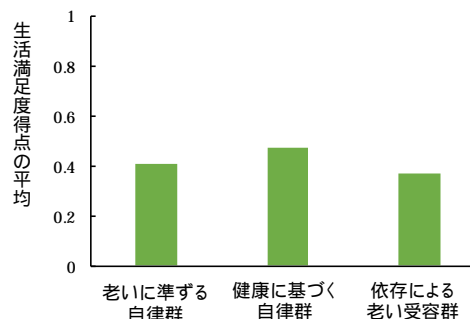


図4 生活満足度と各クラスターの関連

しかし、IADL とクラスターの間には統計的に有意な関連は認められなかった。本研究で回答の得られた調査協力者のほぼ全員が、高いIADLを有しており、IADL得点にばらつきがなかったことが関連している可能性がある。今後は心理的自律性の測定概念の検討とともに、低IADLの対象者をサンプリングし、再調査することが課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

深瀬裕子(2014). 高齢知的障害者のロールシャッハ・テスト反応内容の継起分析による検討— 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 12, 18-24. 査読

なし

Fukase, Y., Arai, S., Okii, A., Suzukamo, Y., & Suga, T. (2014). Experiences of a patient with chronic spasticity prior to using botulinum toxin (1): An analysis using the Trajectory Equifinality Model. Proceedings of the Annual International Conference on Cognitive and Behavioral Psychology (CBP), 3, 40-43. 査読有

DOI 10.5176/2251-1865_CBP14.25

Arai, S., Fukase, Y., Okii, A., Suzukamo, Y., & Suga, T. (2014). Experiences of a chronic spasticity patient prior to using botulinum toxin (2): An analysis using the modified grounded theory approach (M-GTA). Proceedings of the Annual International Conference on Cognitive and Behavioral Psychology (CBP), 3, 44-47. 査読有

DOI 10.5176/2251-1865_CBP14.26

深瀬裕子・岡本祐子 (2013). 施設入所高齢者との心理療法における事例理解—Erikson の心理社会的課題の援用— 心理臨床学研究, 31, 725-735. 査読有

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40019977505>

前盛ひとみ・岡本祐子・上手由香・奥田紗史美・深瀬裕子・神谷真由美 (2013). 心理臨床家のプロフェッションの生成と継承—自己への直面化, 経験を言葉にすること— 香川大学教育学部研究報告 第 部, 140, 11-27. 査読なし

奥田紗史美・岡本祐子・上手由香・前盛ひとみ・深瀬裕子・神谷真由美 (2013). 心理臨床家のプロフェッションの生成と継承—活力と信じることをめぐって— 香川大学教育学部研究報告 第 部, 140, 29-44. 査読なし

上手由香・岡本祐子・奥田紗史美・前盛ひとみ・深瀬裕子・神谷真由美 (2013). 心理臨床家のプロフェッションの生成と継承—専門性のなかに個人的資質が生きること— 香川大学教育学部研究報告 第 部, 140, 45-58. 査読なし

深瀬裕子・荒井佐和子 (2012). 大学生の就業意識とアイデンティティ・ステータス 広島大学心理学研究, 12, 85-91. 査読なし

http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/metadb/up/kiyo/AA11616129/HPR_12_85.pdf

神谷真由美・岡本祐子・上手由香・奥田紗史美・前盛ひとみ・深瀬裕子 (2012). 心理臨床家のプロフェッションの生成と継承 I—理想の心理臨床家の追及— 広島大学心理学研究, 12, 103-115. 査読なし

http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/metadb/up/kiyo/AA11616129/HPR_12_103.pdf

深瀬裕子・岡本祐子・上手由香・奥田紗史美・前盛ひとみ・神谷真由美 (2012). 心理臨床家のプロフェッションの生成と継承 II—唯一無二の人生・体験への尊び— 広島大学心理学研究, 12, 117-126. 査読なし

し

http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/metadb/up/kiyo/AA11616129/HPR_12_117.pdf

深瀬裕子・岡本祐子 (2012). 高齢者の語りに基づく母親の人物との相互性の変容 発達心理学研究, 23, 55-65. 査読有

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009426190>

[学会発表](計 17 件)

深瀬裕子・木谷智子・下田千尋. 高齢者の自律性尺度の因子構造 日本発達心理学会第 25 回大会. 2014 年 3 月 22 日, 京都大学 (京都府)

Arai, S., Fukase, Y., Okii, A., Suzukamo, Y., & Suga, T. Experiences of a chronic spasticity patient prior to using botulinum toxin (2): An analysis using the modified grounded theory approach (M-GTA). 3rd Annual International Conference on Cognitive and Behavioral Psychology. 2014 年 2 月 25 日 (Canning Walk, Singapore).

Fukase, Y., Arai, S., Okii, A., Suzukamo, Y., & Suga, T. Experiences of a patient with chronic spasticity prior to using botulinum toxin (1): An analysis using the Trajectory Equifinality Model. 3rd Annual International Conference on Cognitive and Behavioral Psychology. 2014 年 2 月 24 日 (Canning Walk, Singapore)

深瀬裕子・下田千尋・木谷智子. 高齢者の心理的自律性尺度作成の試み 中国四国心理学会第 69 回大会. 2013 年 11 月 17 日, 山口大学 (山口県)

深瀬裕子・荒井佐和子. 大学生のフリーター観とアイデンティティ・ステータス 日本心理学会第 77 回大会. 2013 年 9 月 19 日, 札幌コンベンションセンター・札幌市産業振興センター (北海道)

荒井佐和子・深瀬裕子・沖井 明. 慢性期脳卒中片麻痺者は初回ボツリヌス治療の効果をどのように体験しているのか 日本質的心理学会第 10 回大会. 2013 年 8 月 31 日, 立命館大学 (京都府)

深瀬裕子. 視覚障害を有する女性高齢者の心理面接 日本心理臨床学会第 32 回大会. 2013 年 8 月 27 日, 横浜コンベンションホール (神奈川県).

Fukase, Y., Takano, Y., & Koya, M. How is trust vs. mistrust manifested in elderly Japanese? The 5th Asian Congress of Health Psychology. 2013 年 8 月 22 日 (Daejeon, Korea).

Fukase, Y., Koya, M., & Takano, Y. Challenge of autonomy vs. shame/ doubt: How resolved by older Japanese? The 13th European Congress of Psychology. 2013 年 7 月 12 日 (Stockholm, Sweden).

深瀬裕子・荒井佐和子. 日常生活における自律性 (autonomy) の感覚—半構造化面接によるカテゴリーの生成— 日本老年社会科学大会. 2013 年 6 月 6 日, 大阪

大学 (大阪府)
野村信威 (司会) 山崎寛恵・安田裕子・深瀬裕子 (話題提供) やまだようこ (指定討論) 大会委員会企画シンポジウム 発達心理学における質的研究の新たな展開へ向けて 日本発達心理学会. 2013年3月17日, 明治学院大学 (東京都)
中川 威 (企画・司会) 小澤義雄・田淵恵 (企画・話題提供) 深瀬裕子 (話題提供) 岡本祐子・遠藤利彦 (指定討論) 会員企画ラウンドテーブル 中年期から老年期に渡る Generativity の発達 日本発達心理学会第24回大会. 2013年3月16日, 明治学院大学 (東京都)
神谷真由美・岡本祐子・高野恵代・深瀬裕子 (2013). 大学生の自己愛的脆弱性と愛着スタイル 日本発達心理学会第24回大会. 2013年3月15日, 明治学院大学 (東京都)
高野恵代・岡本祐子・神谷真由美・深瀬裕子 (2013). 母子関係および同胞関係の視点からみた障害者のきょうだいの心理的体験— 障害者家族の関係性に着目して— 日本発達心理学会第24回大会. 2013年3月15日, 明治学院大学 (東京都)
神谷真由美・岡本祐子・高野恵代・深瀬裕子. 大学生の自己愛的脆弱性と自己対象体験 中国四国心理学会第68回大会. 2012年11月10日, 福山大学 (広島県)
高野恵代・岡本祐子・神谷真由美・深瀬裕子. 障害者のきょうだいの母子関係・同胞関係の類型とその関係性の関連— 半構造化面接による検討— 中国四国心理学会第68回大会. 2012年11月10日, 福山大学 (広島県)
深瀬裕子. 高齢者の迫害・性的妄想をどう考えるか—70代女性との心理療法 日本心理臨床学会第31回大会. 2012年9月19日, 愛知学院大学 (愛知県).

〔図書〕(計3件)

深瀬裕子 (共著) (2014). 神経性習癖の理解と対応 棚橋健治 (監修) 石田 弓 (編著) 兒玉憲一・荒井佐和子・勝見吉彰・大中 章・林智一・深瀬裕子・高田純・信原孝司・渡辺 亘・岡本祐子・尾形明子・大塚泰正 (共著). 教師教育講座第11巻 教育相談 協同出版 pp. 105-117.
岡本祐子・深瀬裕子 (編著) (2013) エピソードでつかむ生涯発達心理学 ミネルヴァ書房 (総245ページ)
深瀬裕子・岡本祐子 (2012). 福祉領域での現実見当識訓練の場合—認知症者に対する福祉領域における 現実見当識訓練と回想法の実践 小海宏之・若松直樹 (監修) 高齢者こころのケアの実践—認知症ケアのためのリハビリテーション 創元社 pp. 36-42.

〔その他〕
研究ホームページ
<http://square.umin.ac.jp/fukase>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深瀬 裕子 (FUKASE YUKO)
広島大学・大学院教育学研究科・助教
研究者番号：80632819